

## 昭和の南海地震体験談

氏名:見上 宏一(けんじょう ひろかず)  
生年月日:昭和4年1月4日  
地震を体験した場所:由良町・自宅寝室  
当時の家族状況:母、弟



### 1) 地震発生時の状況

当時17歳で漁師をしていた。自宅寝室で弟と一緒に就寝中だった。突然の強い揺れで目が覚めたが、それほど恐ろしいとも思わず、布団の中に横になったまま部屋の電灯が横に大きく揺れるのを見ていた。揺れている最中に電気が切れ真っ暗になった。長い時間揺れが続いたと思う。ようやく収まった後、弟と「大きかったなあ」と言葉を交わし、そのまま寝ていた。母だけが起き出し、地震の時は戸を開ける、という言い伝え通り、家中の戸を開けていた。

### 2) 津波襲来時の状況

地震＝津波という事は分かっていたが、大きさの程度が分かっていた。というのも、2年前の東南海地震時の津波を目撃していたからで、潮が引いたり来たりして、海の護岸に積まれていた海軍のドラム缶が浮き崩れた程度で、陸には届かなかった。それ以上に大きな津波が来るとは思っていなかった。母に「浜へ行って、津波が来るって皆が言うてるか見てきて」と言われ、起き出し、1人浜へ行った。知り合いのおじさんも出てきていたので、「おじさん、津波来るか?」と訪ねると、「そんなん来ないわ」と答えてくれたので、自宅に戻り、再び布団に入った。しかし、5分も経たないうちに浜の方から「津波やー!」という声が聞こえた。すぐに家族は何も持たず身一つで山に避難した。電気が切れて真っ暗だったが、母が戸を開けてくれたので素早い行動ができた。暗かったが、山の上から見ていると、潮が来た時は真っ白な線が見え、なくなると引いたことが判る。夜が明け、明るくなった頃、津波も落ち着いたと思いい、母と弟を非難場所に残し、様子を見る為に1人で自宅に戻った。中に入ってみると流れ込んで来たゴミで一杯だった。9時頃に津波に流されず1隻だけ残っていた船に乗せてもらい、持ち船を探しに海に出たが、潮の流れが渦を巻いている状態だった為、進めずに戻ってきた。

### 3) 家族の行動・被害

家族は全員無事だった。自宅は梁下まで、床上1.8m程度の所まで濡れた跡があった。地震の際、母が家中の戸を開け放したので、家財道具は全て流失してしまった。自宅裏に流れて来ていたドラム缶から油が流れ出て、部屋の床上80cm程の所に汚れが付いていた。持ち船は練炭会社近くの陸に穴が開いた状態で乗上げていた。

#### 4) 集落・周囲の被害

何人かは潮に引かれて亡くなった。避難中に手を離れた子供や、避難後に何かを取りに戻った人が亡くなった。一方、お年寄りは1回浸かって、一旦波が引いてから避難し、助かった人が多い。中には布団に横になったまま、畳、床板ごと部屋の中で浮き沈みし、助かった人もいた。船が陸に乗り上げ、家屋を壊した。

#### 5) 地震・津波後の生活

3日間程、山の上の知り合いの家でお世話になり、翌日から10日間は自宅の片付けにかかりきりとなった。山の井戸を使い、すぐに始まった炊き出しをいただいた。持ち船を大工さんに修理してもらい、地震から半月後には漁を再開できた。



#### 6) 次の災害への備え

家族で避難場所や非常時について話をしている。持ち出し袋を常備している。地震に敏感になった。